

春の英国で 総選挙を見た

北海道新聞 文化部長

宇佐美 暢子

英国は今、一年中で最も美しい季節を迎えている。田園地帯は牧草の柔らかな緑と菜の花畑の黄色

が見事な幾何学模様を描いている。都会の落ち着いた色調の街並をリラの花のピンクが明るく彩る。鉛色に塗り込められた暗い冬が長かったからこそ開放感は大きく、一斉に光と色彩があふれ出すのだ。

ロンドンに着いたのは五月一日の夕方だった。ヒースロー空港からバスで市街地に向かう途中、道路わきに「VOTE（投票を）」と呼びかける看板が二つほど目についた。それがなければ、英国が総選挙中だとは気付かない。

この日の最高気温は二四度。午後八時を過ぎても外は明るい。人々は街角のパブの外のいすに腰掛けビール片手におしゃべりだ。「もう投票はしたの？」。心配になつて聞いた。「食事をして、それからよ」と、勤め帰りの女性。驚いた。投票所は夜十時まで開いているという。朝は七時から。英国の選挙投票日はなぜか木曜日と決まっているが、これならウィークデーでも高い投票率が確保できるわけだ。

今回も七一・五%を保った理由がわかった。

ロンドン中心部ハイドパークに近い投票所のひとつをのぞいた。教会の中の幼稚園を使っている。ベニヤ板で仕切った投票用紙記入台が並び、大きなトランクのような投票箱が置いてある。日本とそっくり。というより、英国のシステムを日本がまねたのだろう。途切れなく、人々が投票にやつて来る。投票カード忘れちゃった」とジーンズにTシャツの若い女性。住所と名前を言つて身分証明書を見せると投票OKになった。

出口でさつきから投票カードを回収しているおばあさんがいる。赤いセーターがよく似合う。区役所の人がと思つたら保守党員だった。カードで投票者を手エック、未投票の人に声をかけて回っているのだ。「大丈夫。ブルックは勝つわ」。候補者名を挙げて、おばあさんは小さく拳を握つて見せた。

保守党が強いこのシティー&ウエストミンスター選挙区で、確かにブルック候補は当選した。が、



宇佐見 暢子（うさみ のぶこ）さん

1952年室蘭市生まれ。札幌、函館などで育つ。北海道大学卒業後、1974年北海道新聞社に入社、学芸部（現生活部）、社会部、東京政経部で記者活動、釧路報道部次長を経て1995年より現職。

他の選挙区の現実は厳しいものだった。二日の新聞各紙は「Landslide Victory」の見出しで、労働党の圧勝を伝えた。日本語の「地滑りの勝利」というのはこの英語を翻訳したものだとは知った。単独過半数を大きく上回る四百十九議席を取ったのだからまさに地滑りの。これに対し保守党は、リフキンド外相ら有力閣僚が次々落選、前回の半数にも満たない百六十五議席に止まった。その夜は結局、BBC（英国放送協会）テレビの選挙速報を見つけて徹夜してしまった。日本のように、途中経過や当確打ちはない。結果は選挙区ごとに一回で発表される。完全小選挙区制だから、一選挙区の投票数はせいぜい約七万票、一百万票前後が当選ラインで、開票は早い。候補者が一列に並び公開の場で得票数が読み上げられる。その後、当落にかかわりなく候補者は一人ずつコメントする。ガッツポーズ、涙、喜びの抱擁、がつくりと落とした肩。テレビは明暗をはっきり映し出した。BBCのコンピューターグラフィック

クスは、各党のシンボルカラーで英国地図を染め分ける。労働党の赤で地図の大部分は埋まった。

保守党から十八年ぶりに政権を奪回した労働党の勝利の背景は何か。選挙速報を見ながら考えた。

例えばスコットランドとウェールズ。ここで保守党はついに議席をすべて失った。一八世紀の初めまで独立国だったスコットランドは、ロンドン（イングランド）への対抗意識が強く、政権党でイングランド中心の保守党の基盤はもとも弱かった。選挙戦で労働党はスコットランドの独自議会設立で国民投票を行うことを公約した。これに対し保守党は、英国の崩壊を招くと反対したことが響いた。それだけではなさそうだった。農業地帯のこの地区の農民票が変わった。日本でいえば農協に当たる英国農民連盟は、集票マシンの役割はないが、これまで経済安定政策をとる保守党支持者が少なくなかった。が、あの狂牛病問題が尾を引き、一年以上たつた今も欧州各国は英国産牛肉の輸入禁止を続けて



▲投票所の出口には投票チェックのための保守党員(左端)がいた



▲「地滑り的な勝利」などの見出しで報じた5月2日のロンドン各紙



▲勝利に笑顔のブレア首相だが……
= 5月3日のファイナンシャル・タイムズより =

いる。農民はメイジャー政権に
いそをつかせたのではないか。
実は総体で見れば、保守党と
労働党の政策にそれほど明確な
違いはない。労働党はかつての

り路線から大きく右旋回し、中
道政党に変身した。だからこそ、
多くの人は四十三歳の若き党首
トニー・ブレアに未来を託した。
結果として、国民は政治に改革を

めた。偉大な英国国民の信頼にこた
えたい。紺のスーツに赤いネク
タイのブレア党首は、一日未明の勝
利宣言でこう言った。

夜が明けると、テレビはダウニ
ング街十番地の首相官邸前を映
し出していた。英国旗を振り、新
首相を迎える人々の熱気が伝わ
った。私も近くまで出掛けて、輪
の中に入り、その興奮の一部を味
わった。もうひとつこつたがえし
ていたところがある。バッキンガ
ム宮殿前だ。激しい戦いの結果を
受けて、首相を任命するのはこの
国では議会ではなく、女王なのだ。
少し不思議な気がした。

が、この儀式が済むとあつとい
う間に組閣は行われた。派閥間の
人事調整に時間をかける日本とは
大違いだ。東京で一年にわたり自
民党の宮沢政権誕生の推移を取
材した当時のことを思い出した。
日本の政治が、英国の議会制民
主主義に学ぶ点はたくさんある。小
選挙区制になったといっても、日
本の制度は比例代表並立制で、一
度落選したはずの候補が比例区で
よみがえるおかしな代物だ。金の

かからない選挙」も絵に描いた
手に過ぎない。

その点、英国は候補個人の負担
は少なく、法定選挙費用は約八百
ポンド(約百六十万円)。党が資金
援助をするし、戸別訪問を主体に
した選挙運動は地区党員やボラン
ティア中心だ。候補は公募で選
ばれることも多く、普通のサラリ
ーマンが休暇を取って立候補する
ことも可能だ。候補者は必ずしも
地元出身者に限らず、政党が選挙
区を割り振る。選挙の訴えも、日
本のように施設や道路を作るなど
の地元利益誘導型ではなく、党
策中心だ。だから意欲や能力次第
でだれでも候補者になることを
可能にする。地縁、血縁、カネに
縛られない被選挙権の保障がし
かりとできていることに感心させ
られた。

世界の注目を集めた英国総選挙。
その歴史的な瞬間に、ロンドンに
居合わせる幸運を得たうえ、日
本の政治や選挙についてあらため
て考えるという土産も持ち帰るこ
とができた今回の旅は忘れ難い
ものになった。